

宮崎大教育 篠原久枝

目的：「少子化」によって出産がファッション化傾向をみせ、様々な形態のお産が行われるようになり、中でも「夫立ち会い分娩」の人気の高まっている。NHKの「日本人の意識調査」においても家庭内の性役割分担型の支持率は減少し、家庭内協力型が増加している。しかしながら、総務庁の調査によると共働き世帯においても、妻の家事時間が4時間弱であるのに対して、夫はわずか10数分とされている。そこで、本研究では、宮崎県内における夫立ち会い分娩の実態と家事・育児参加に対する意識、夫婦間での意識の違い等について調査、分析を行った。

調査方法：1994年11月 県内5市2町の乳児検診及び子育てふれあい教室に訪れた母親にアンケートを配布し、郵送により回収した。調査用紙は妻用、夫用と2部配布した。有効回答数167、回収率30.9%であった。

結果：調査対象者のうち、夫立ち会い分娩をした群47名、希望したができなかった群50名、希望しなかった群70名であった。立ち会い分娩をした満足度は、妻、夫共に高く、次の分娩においても立ち会いを希望した者が多かった。家事・育児への協力度は、立ち会い分娩群において他の群より高く、中でも「入浴」「子どもと遊ぶ」など育児への協力度が高かった。一方、男性からは「参加する気持ちはあるが、時間的余裕が無い」「出産後一ヶ月間有給休暇を取ったが、その後残業、休日出勤に追われている。慣習に逆らうのは大変」などの意見も聞かれた。男女共同参画社会を目指して社会的な支援制度も確立されつつあるが、それらを利用しやすい環境作りが今後の課題であると思われる。